

『抗日パルチザン参加者たちの回想記』読書会 vol.5



テキスト 梶村秀樹『排外主義克服のための朝鮮史』（平凡社ライブラリー、2014年12月）

戦後日本の朝鮮史研究のパイオニアであった梶村秀樹が、日本人が知るべき朝鮮近現代史を平明に情熱的に説いた3回の連続講演の記録。今回は、とくに「II 朝鮮民族解放闘争史と国際共産主義運動」のうち、「三 在日朝鮮人運動と日本人民の墮落」「四 金日成の抗日パルチザン闘争と八・一五への若干の諸問題」を重点的に読みます。

日時 **6月30日** 場所 **赤羽北区民センター（赤羽北ふれあい館）**
(日)午後1時15分～4時半 第1和室(椅子・座布団あり。アクトピア北赤羽六号館3階)
JR埼京線北赤羽駅赤羽口から徒歩1分、北区赤羽2-25-8

参加費 ひとり**500円**(要予約)

主催(予約) 前田年昭 メール tmaeda1966516@gmail.com
電話 080-5075-6869

- 参加希望の方は事前にお申し込みください(電話・メール)。
- 当日は報告者の問題提起と、感想や意見の交流、討議を行います。
- あらかじめ対象テキストを読んできてください。

13:30～14:30 **報告** 前田年昭(組版労働者)
『排外主義克服のための朝鮮史』(II-三、四)のいま
14:30～16:30 **討議**



第1回読書会(5月20日)で、「回想記」の歴史的背景、1930～40年代の朝鮮人民の抗日革命闘争史を学んだ私たちは、第2回(8月13日、報告:田代ゆき、キム・ヨンイル、須田光照)、第3回(12月2日、報告:キム・ヨンイル、前田年昭)、第4回(4月6日、報告:土田宏樹)と、参加者それぞれが選んだ回想記について報告し、全員での意見交換、討議を続けてきました。

次の第5回は、戦後日本の朝鮮近代史研究のパイオニアであった梶村秀樹(1935～89)の『排外主義克服のための朝鮮史』(とくにII-三、四)を学ぶことにします。梶村は、朝鮮は外の大国によって動かされてきたという見方や、古代のまま停滞しているという見

方を批判し、朝鮮史の原動力は朝鮮人民の主体的内在的な力にあるという「内在的発展」の立場を強調しました。朝鮮史の研究と同時に彼は、朝鮮人差別撤廃の運動を推し進め、日本の自民族中心の排外的あり方を批判し続けました。本書は、日本の労働者のなかにある民族排外主義を克服し、朝鮮人民との組織的な連帯をめざす思想的な手がかりです。

抗日パルチザン闘争と「在日朝鮮人運動と日本人民の墮落」、そのなかで連帯をめざして試行錯誤した少数の先人の闘いを知り、学ぶことは、私たち自身の生きる糧です。労働者に国境はありません。ともに読み、考え、話し合しましょう。

『翻訳と連帯 ある寄せ場労働者の「抗日パルチザン参加者たちの回想記」翻訳の軌跡』

(編訳・鈴木武、発行・同志社コリア研究センター、2023年3月17日、非売品、A5判328ページ)

※本書は『回想記』全264話から精選した28話で、電子版が発行元の同志社コリア

研究センターのウェブサイト <https://do-cks.net/works/publication/korea05/>

で読めます。QRコードは⇒

264話全訳データは <https://fire.st/h6yq1ut> にあります。



第四回読書会での報告を終えて
帝国主義の阿片圏再分割戦争に
おける日本の罪深さを思う

土田宏樹

今回の読書会で取り上げた3編のうち『未来の幸福のために』(リ・ヨンスク)と『カガヨンでの工作』(キム・ドンギユ)は1938年、『トゥマン(豆満)江の水塊をかき分けて』(キム・ドンギユ)は1943年であったことを回想している。『未来の幸福のために』では作中さらに2年さかのぼって1936年晩秋から翌年のことも織り込まれる。

その1936年晩秋、作者は討伐隊に襲撃されて5名の同志とともに囚われの身となった。全員が女性である。連れていかれた病監には激しい拷問を受けて息も絶え絶えの男性同志が横たわっていた。敵は、彼の(敗残の姿)を見せつけることで彼女たちを絶望させ、抗う意思を挫こうと企んだのである。

ところが、男性同志は肉体は破壊されても敗残者ではなかった。逆に「共産主義者らしく最後まで闘わなければならない」と彼女たちを励ます。彼はじきじきになったが、その言葉は「私の心の中に無尽蔵の力と勇気を湧かした。敵の「陰險な術策」は打ち砕かれたのである。そしてそのときの彼の言葉、ふるまいは2年後、まだ4歳の

【裏面につづく】

【表面からのつづき】

幼い娘を母に預けて戦いの場に赴こうとする彼女を励まし、奮い立たせる。

身が敵の手中に落ちたときの革命家の処し方を教えてくれる一編であるかと思う。私はたまにアンソニー・グラムシの伝記を読んでいたところだった。この回想と同時期（1936年〜38年）、イタリアではグラムシが1937年4月、刑期満了で出獄して6日後に46歳で死んで

いる。共産党の国会議員として1926年から囚われの身だった彼は元々病弱。33年3月に動脈硬化の発作で倒れて以降自力では立てない状態だったのに、ファシスト政府は必要な治療を彼に施さなかった。出獄後といつてもほとんど獄中死である。そんな状態でも転向を拒んで獄中で独特の革命思想を紡いでいった。

『未来の幸福のために』を何度かくりかえし読むうち、第2回読書会で田代ゆきさんが採り上げ、報告された『明けてくる明日のために』も同じ作者（リ・ヨンスク）が書いていることに気づいた。こちらは1939年にあったことの回想であり、作者らは1937年に囚われから脱出していたことにも触れられている。ぶれない姿勢がまぶしい。

『トゥマン（豆満）江の水塊をかき分けて』が回想する19

43年早春といえば、回想記の中でも時期が後ろのほう。バル

チザンの司令部はトゥマン江のソ連領側に置かれている。朝鮮国内で偵察活動を行ない、司令部に戻る時の話である。戻るときにはトゥマン江を渡らなくてはならない。畔の連絡場所には約束の時間に小舟が待機しているはずだった。

ところが寒さと飢え、激しい吹雪の中で同行3人のうち2人は行き倒れてしまう。ただ一人、作者キム・ドンギュが時間に遅れて到着したときには小舟は行ってしまっている。

なんとも絶望的な状況だ。回想記ではバルチザンが寒さと飢えに苦しんだことがくり返し書かれていく。この一編では、加えて何日も雪の中を歩いてきた疲労困憊の身体で、水塊が浮かぶ早春の大河を泳いで渡るとい

うのである。「……やと川の真ん中ほどに来た時、もうそれ以上泳ぐ筋力がなかった。それに加えて手足は痙攣を起し、舌までもつれた」凍った肉は刀のような水塊の角で裂かれ、切られて、いつのまにか全身は血まみれになった。溺死しなかったのが不思議だけれども、とうとう泳ぎ切って任務を遂行する。不屈の闘志と精神力に頭が下がる。しかし、任務をやり切った達成感以上に同志2人を失った悔恨が行間に滲み出ているよう

に思う。心に残る一編である。

同じキム・ドンギュによる『カガヨンでの工作』は、第3回読書会のテキストの一つ『敵を瓦解させて』（チュ・ヒョン）と状況に似た点が多い。1933年の出来事を叙した『敵を瓦解させて』では、作者は警察分署の分署長とまず意を通じ、続いて偽満軍の中隊長まで遊撃隊の協力者にしてしまう。『カガヨンでの工作』の作者は警察署長に工作して協力者にする。

両者の違いの一つは、『カガヨンでの工作』では（反日会）という語が頻出することである。『敵を瓦解させて』では（反日部隊）という語は出てくるけれども（反日会）という語は見当たらない。特選集の他の作品の中にもあまり見当たらないのではないか。

この（反日会）とは何か。第4回読書会での前田さんのレジュメに参考資料として祖国光復会十大綱領というのが載っている。その祖国光復会と関係するのだろうか。抗日バルチザンの歴史に不勉強なのでよくわからないのだが、もしそうであるなら、コミンテルン第7回大会における反ファシズム人民戦線提

起が1935年7月、中国共産党の8・1宣言が同年8月、朝鮮における祖国光復会の発足は1936年で、『敵を瓦解させて』と『カガヨンでの工作』はその

前後だから納得が行くのだが。

第3回読書会から議論になっているのは、相手への工作の仕方である。『敵を瓦解させて』における、弱味を握ることで（再裏切り）をさせない、また阿片中毒者に阿片を贈る（相手の心身を破壊する）ようなやり方は解放運動としてどうなのか。

『カガヨンでの工作』でも工作対象である警察署長にキム・ドンギュは「贈り物として阿片と少なからぬ金を用意」したし、顔を合わせて「挨拶を終えるところはキセルに阿片を詰めて火まつつけて彼に勧めた。当時これはこの階層における一種の風習化された礼儀でもあったのを私

は知っていたのである」。

初対面の相手にあくまで儀礼として用いる（お近づきのシルシ？）ののだとしても、問題はその後（警察署長）にどう対応したかは書かれていない。この編に限らず、阿片は回想記中しばしば登場するのに、それを排斥する記述は乏しいようである。

キム・ドンギュはさすがに「私にはやむを得ず受け取って吸うふりをしながら」と自身を律しているが。ただ、『敵を瓦解させて』では工作対象を（利用する）というニユアンスが感じられるのに対して『カガヨンでの工作』におい

ては（仲間として獲得する）スタ

ンスがあるように思う。両者のニュアンスの違いは、前述したように、間に反ファシズム人民戦線の提唱（1935年）や祖国光復会発足（1936年）があることにもよるのではないか。それにしても19世紀にアヘン戦争を引き起こしたイギリスに替わって、20世紀には日本がアジアを阿片漬けにして儲けた。だから日中戦争を（日中アヘン戦争）と呼ぶ論者もいる。大東亜阿片圏という言葉もある。「大東亜戦争」なるものは大東亜阿片圏をめぐる列強の再分割戦争だったと。日本帝国主義の罪深さを思う。

感想

著者、時期、状況から浮かび上がる 抗日バルチザン闘争の輪郭

キム・ヨンスル

当読書会も4回を数えた。今回、土田さんが選んだ対象話には、過去の報告で取り上げられた対象話の著者（リ・ヨンスク）が異なる時期と状況について書いたもの、また同じ主題（偽満警察への工作）を別の著者（キム・ドンギュ）が書いたものが含まれていた。回想記全体は大部ではあるが、少しずつでも読み進めていくことで、抗日バルチザン闘争の輪郭が浮かんでくるように、学びの醍醐味を感じる。リ・ヨンスク『未来の幸福のために』は、抗日遊撃隊に志願する女性兵士が娘を母に託して

旅立つ前日譚。別れを惜しみ慈しむ中、日帝討伐隊による弾圧とそこで拷問虐殺された遊撃隊員を想起したのはなぜか。生きて再び会えるのか、永遠の離別かもしれない。しかし、未来の幸福のために闘うと誓うことで、別れを新たな旅立ちとするのだ。なお、著者は2021年に105歳でその生涯を閉じた（2021年11月16日、高知新聞、<https://www.kochinews.co.jp/article/detail/522330>）。

キム・ドンギュ『カガヨンでの工作』では、リムガン県カガヨン部落における住民の組織化と支援、および物資の調達を遂行する上で障害となっている偽満警察への工作任務が描かれている。信と義に基づき働きかけることで信頼を獲得する様子はチュ・ヒョン『敵を瓦解させて』とは対照的である。金日成から金正日への無原